

# 宿毛貝塚発掘調査報告書

1986. 3. 31

高知県教育委員会

## 序

宿毛貝塚は、高知県西部の宿毛市に所在する縄文時代の貝塚で、明治後半から重要な貝塚として注目されてきた遺跡であります。昭和24年8月に、高知県教育委員会が、この貝塚の発掘調査を実施し、その結果二つの貝塚をもつ四国で最大規模の貝塚であることが判明しました。

宿毛貝塚については、昭和32年7月に国史跡に指定され、また、昭和53年度には指定地の一部が公有化されて、遺跡の保存措置が講じられてまいりましたが、近年、宅地開発の波は、周辺地へも及び、年々遺跡の景観が変貌し、遺跡の保存措置について具体的な方策を検討する必要が生じてまいりました。

このため、遺跡の範囲及び性格についてさらに具体的に明らかにする発掘調査を、昭和60年度国庫補助事業として実施いたしました。

本報告書は、この調査の成果をまとめたものであり、広く一般に活用されて、私達が歴史を研究し祖先の生活を理解する一資料となれば幸いであります。

最後に、調査にあたり終始御指導を賜った先生方、文化庁記念物課の調査官並びに調査に御協力下さった宿毛市教育委員会及び地権者の方々を始めとする地元宿毛市貝塚地区の皆様方に厚く御礼申しあげます。

昭和61年3月31日

高知県教育委員会  
教育長 中澤秀夫

## 例　　言

1. 本書は、高知県教育委員会が国庫補助を受けて昭和60年度に実施した宿毛貝塚発掘調査の報告書である。
2. 調査は、高知県教育委員会が主体となり、宿毛市教育委員会の協力を得て実施した。調査担当者は、高知県教育委員会文化振興課主幹下村公彦、主事山本哲也、主事廣田佳久である。
3. 本書で使用した図面のうち、第1図及び第3図は、国土地理院発行国土基本図5千分の1(IV-KC-21)を複製使用した。なお、方位は磁北(M・N)及び真北(T・N)を併用して使用し、レベル高は海拔高度で単位はメートルによる。
4. 宿毛市中央公民館に保管されている宿毛貝塚の採集資料を、宿毛市教育委員会の協力を得て付録で紹介した。
5. 出土遺物のなかで、人骨については林一正氏(高知県警察本部鑑識課法医研究員)に、また、獣骨については古原義男氏(高知女子大学教授)に鑑定していただき、懇切な御教示、御助言をいただいた。記して厚くお礼申しあげたい。
6. 遺物整理及び報告書作成は、調査担当者がそれぞれ分担して行った。
7. 本書の執筆分担は、文末に記した。編集は、山本、廣田が担当した。

## 本文目次

|                |   |
|----------------|---|
| I 調査に至る経緯と調査経過 | 1 |
| II 遺跡の立地と環境    | 1 |
| III 調査の概要      | 3 |
| 1. 1次調査        | 3 |
| 調査方法           | 3 |
| 層序             | 3 |
| 遺物             | 4 |
| 2. 2次調査        | 5 |
| 調査方法           | 5 |
| 層序             | 6 |
| 遺物             | 7 |
| IV まとめ         | 8 |
| V 付録 宿毛貝塚採集資料  | 9 |

## 表目次

Tab. 1 多角測量座標成果一覧表

## 挿図目次

|                              |                         |
|------------------------------|-------------------------|
| Fig. 1 貝塚周辺図                 | Fig. 9 G1出土縄文土器拓影図      |
| Fig. 2 周辺地形図及び調査区設定図         | Fig. 10 G2出土遺物実測図       |
| Fig. 3 多角測量基準点網図             | Fig. 11 G1出土遺物実測図(石器)   |
| Fig. 4 G1遺物出土状態              | Fig. 12 G1出土遺物実測図       |
| Fig. 5 G2遺構及びG1・2セクション       | Fig. 13 TR3出土縄文土器拓影図    |
| Fig. 6 TR3遺構平面図及びセクション       | Fig. 14 TR2・3出土遺物実測図    |
| Fig. 7 TR1～8セクション            | Fig. 15 縄文土器拓影図(I～III類) |
| Fig. 8 G1(下部貝層)出土縄文土器<br>拓影図 | Fig. 16 縄文土器拓影図(IV～V類)  |
|                              | Fig. 17 縄文土器、石器実測図      |

## 図 版 目 次

|       |   |        |  |
|-------|---|--------|--|
| PL. 1 | 遺跡遠景（北から）<br>“ (南から)                              | PL. 10 | TR 3 完掘状況（西から）<br>TR 4 ~ 8 調査地近景（南から）  |
| PL. 2 | 東貝塚近景（東から）<br>1次調査地近景（発掘前南から）                     | PL. 11 | TR 4 ~ 8 設定状況（北東から）<br>TR 6 完掘状況（北東から） |
| PL. 3 | G1 設定状況（南から）<br>G1 調査風景（西から）                      | PL. 12 | G1 貝層出土繩文土器                            |
| PL. 4 | G1 第Ⅲ層中遺物出土状態<br>(北から)<br>G1 第Ⅲ層中遺見出土状態<br>(北東から) | PL. 13 | G1 貝層出土繩文土器                            |
| PL. 5 | 石錐出土状態（南から）<br>G1 完掘状況（西から）                       | PL. 14 | G1 貝層出土繩文土器                            |
| PL. 6 | G1 土層堆積状態（北から）<br>G2 完掘状況（西から）                    | PL. 15 | G1 かく乱層出土繩文土器                          |
| PL. 7 | G1 完掘状況（北東から）<br>“ (南から)                          | PL. 16 | G1 出土石器・土器                             |
| PL. 8 | TR 1・2 調査風景（西から）<br>TR 1 土層堆積状態（南東から）             | PL. 17 | G1 貝層出土石器・貝類                           |
| PL. 9 | TR 3 造構検出状態図（西から）<br>“ (北から)                      | PL. 18 | G1 出土貝輪・骨角器                            |
|       |   | PL. 19 | G1 出土人骨                                |
|       |   | PL. 20 | TR 3 包含層出土繩文土器                         |
|       |   | PL. 21 | TR 2, TR 3 出土石器・土器                     |
|       |   | PL. 22 | 宿毛貝塚採集資料                               |
|       |   | PL. 23 | 宿毛貝塚採集資料                               |

## I 調査に至る経緯と調査経過

宿毛貝塚は、昭和24年8月に行われた発掘調査によって、東と西の2つの貝塚をもつ縄文時代後期の貝塚であることが確認された。その後、昭和32年7月27日に、国の史跡として指定され、また、昭和53年度には、指定地のうち西の貝塚が公有化されている。宿毛貝塚は、四国西南部に所在する貝塚として西日本の後期縄文文化を考察するうえで重要な位置を占めており、研究対象として高く評価されてきた遺跡である。

しかしながら、遺跡は、宿毛市の市街地に隣接しているところから、宅地開発が進み、景観も急速な変貌をとげており、遺跡の保存策を検討する必要が生じてきた。このことから、遺跡の範囲及び性格について解明することを目的として、昭和60年度の国庫補助事業により、発掘調査を実施することとなった。

昭和60年4月18日に、宿毛貝塚の東の貝塚において、庭木の移植中に縄文時代の人骨が出土したことから、緊急に発掘調査を実施する必要が生じ、宿毛貝塚の1次調査として調査を行った。1次調査は、昭和60年7月4日から7月14日まで、縄文人骨の出土地点を中心にして、2ヶ所のトレンチを設定して調査を行った(G1, G2)。調査日数11日、発掘面積約20m<sup>2</sup>である。

また、2次調査として、東貝塚の周辺地についてトレンチ調査を実施した。2次調査は、昭和61年1月16日から1月30日まで東貝塚の周辺部において、TR1～TR8の計8ヶ所のトレチを設定して調査を行った。調査日数15日、発掘面積約80m<sup>2</sup>である。

なお、調査体制は、下記のとおりである。

主任調査員 山本哲也 (高知県教育委員会文化振興課主事)

調査員 下村公彦 (高知県教育委員会文化振興課主幹)

廣田住久 (高知県教育委員会文化振興課主事)

調査顧問 関本健児 (高知県文化財保護審議会会長)

(山本)

## II 遺跡の立地と環境

宿毛貝塚は、高知県最西端の宿毛市の頼成寺山の山麓にある小高い台地上に位置し、南西方向には波静かなリアス式の宿毛湾を望む。本貝塚の記録は、比較的古く、『長宗我部地帳』まで遡ることができる。しかし、考古学的に紹介されたのは、明治後半になってからのことであり、それ以来、全国的に有名な貝塚の1つに数えられ、大正から昭和の始めにかけて、貝塚やその出土遺物が何度か紹介されている。この間、発掘も1・2度行われているが、調査報告書として発行されたものはない。そして、終戦後、考古学の流行という時代風潮の中で、遺

跡、遺物への関心が高まる一方、貝塚の破壊や遺物の散失という状況を呈した。この対応策として、高知県教育委員会が主体となった発掘調査が昭和24年8月に実施された。その成果は、『宿毛貝塚』（高知県史跡名勝天然記念物調査報告書第四集）として、高知県教育委員会から昭和26年3月に発行されている。昭和32年7月27日には、国の史跡に指定され、今回の発掘調査までの間に、『高知県史』考古編、『宿毛市史』等に詳しく貝塚やその出土遺物の紹介や分析が記載されている。

貝塚周辺の状況は、昭和24年当時、民家が3軒存在するのみで、他はすべて水田や畠地であり、遺跡の保存状況は、比較的良好であったことがうかがえる。しかし、現在は、国の史跡に指定されている部分は保存されているが、宿毛市の市街化に伴い、住宅が増加しており、特に公有化された西貝塚の南側には近代的なマンションが建設され、当時水田であった部分もかなり宅地化され、戦後まもない頃の景観はほとんど残っていない。

当時の地形は、昭和24年の宿毛貝塚発掘調査の際自然遺物を分析された酒詰仲男博士によると、貝塚が営まれた初期には、外洋に近い性格の海がこの貝塚の存在している台地の直下まで迫っていたが、やがて泥海が生じ、内湾性の浅い海になったとされている。このことからして、現在の宿毛市の市街地のはほとんどが水面下であったと考えられ、山際の比較的限られた場所においてのみ、縄文人が生活していたとみられる。また、本貝塚の立地する小高い台地は、願成寺山の山麓のごく限られた部分であり、集落構成も比較的小規模であったと推測される。さらに、貝殻の分布範囲は明確ではないが、貝殻の散布範囲が100～150mと比較的狭いことからも、そのことがうかがえる。貝塚は、東貝塚と西貝塚とに分れているが、出土遺物からほぼ同時期のものと考えられており、ほぼ同時に形成されたとみられる。両貝塚は約60m離れているが、その理由は不明確である。<sup>(4)</sup>さらに、これら貝塚を形成した縄文人の住居も発見されていない。貝塚周辺の当時の地形を復元してみると、東貝塚から西貝塚に向って緩やかに傾斜していたと考えられ、両貝塚の南端及び東貝塚の東端を境として海面へやや傾斜して下り、貝塚の北側は、山に向って緩やかな傾斜で上がっていたと考えられる。2次の調査区は、東貝塚の主に南側と北側であったが、先述の如く住居跡と考えられる遺構は検出されなかった。このことからして、貝塚を形成した縄文人の生活域は両貝塚にはさまれた部分とも考えられる。しかし、当該部分の大半に住宅が建てられており、今後とも集落の全容を明らかにすることは困難であるといわざるを得ない。(Fig 1)

(廣田)

註 (1) 稲多郡の部に、「カイツカ拾代……」等の記載がある。

(2) 寺石正路『土佐古跡巡遊録』明治43年9月の条に「宿毛貝塚の発掘」と題し、貝塚の状況及び出土遺物について報告している。

(3) 杉山壽栄男、藤岡謙次郎、澤田秀穂等によって紹介されている。

(4) 岡本健児『貝塚の状況』『宿毛貝塚』昭和26年3月 高知県教育委員会

### III 調査の概要

#### 1. 1次調査

##### 調査方法

縄文人骨の出土により、新たに遺物が出土することが考えられたため、出土地点を中心にして  $2.5m \times 6m$  のトレンチを設定し、調査の便宜上 G1 と呼称することとした。また、G1 の北側に小トレンチを設けて、G2 とした。調査は、貝層上部まで人力により堆土作業を行い、貝層の検出にあたっては、5 cm 単位の深さで精査を行った。貝層は、混土貝層であるため、堆土については水洗作業を行った。G1 の南端では、かく乱層の堆積が深いため、堆土作業にあたって重機を使用することとした。また、G1においては、貝層下部の暗茶褐色粘質土から中期縄文土器が出土したため、全体を地山層まで掘り下げるのこととした。(Fig 2)

##### 層序

G1 については、表土下約50cmで貝層上面に至るが、西側及び南側は後世のかく乱が著しく、東南部は比較的良好に貝層が残存していた。貝層の堆積厚は、約35cmで薄い状態であった。G1 の基本層序は、第I層・耕作土で灰茶色粘礫土、第II層・褐色混土貝層、第III層・茶褐色混土貝層、第IV層・暗茶褐色粘質土、第V層・茶褐色粘質土、第VI層・黄茶色粘質土である。混土貝層は、第II層と第III層で、第III層上部からの遺物の出土点数が多かった。(Fig 4)

第II層と第III層は、色調及び貝の密集度から区分されるものであり、第II層にくらべて、第III層の方が貝の密集度合が強かった。また、第III層中には、ハマグリを主体としたブロック状の密集地点が認められた。なお貝層は、全体的に東側にかけて徐々に厚く傾斜して堆積しており、G1 の位置は、東貝塚の貝層形成範囲のなかで、北西端に位置するものであることがうかがわれる。(Fig 5)

G1 東壁の土塁断面観察から、第III層下で第VI層上面にかけて形成されたビット状の落ち込みが認められた。ビット中の堆積土は暗褐色粘質土であった。調査区域が限定されていたため、ビットの性格を明確にすることはできなかったが、第III層下面に遺構が形成されている可能性をもつ。なお、第IV層から第V層上部にかけて、中期初頭の縄文土器が出土したため、第IV層及び第V層は、縄文時代中期初頭に形成された遺物包含層であると考えられる。(Fig 4)

G2 の基本層序は、第I層・耕作土、第II層・暗茶褐色粘礫土でかく乱層、第III層・茶褐色粘質土、第IV層・黄茶色粘質土であり、第II層から遺物が多く出土した。また、第IV層上面において、G2 東側部に浅い土壤状の落ち込みが認められた。この落ち込みについては、その性格が判断としないが、遺構の可能性を有するものとして把握することが必要と考えられる。

## 遺物

### 縄文土器

#### G1 下部貝層出土土器 (Fig8 1~12)

G1 のなかで、上下に2区分された貝層のうち、下部貝層から出土した土器である。磨消繩文土器は、福田KII式土器の系統をもち、4は植木鉢状の器形を呈する。9及び10は、2本沈線による文様帯のなかに太い刺突をもつ。3は、2本沈線による縄文帯が曲線的であり、中津式の要素をもつものである。また、5及び6は注口土器であり、5は、赤色顔料を塗彩した磨研土器である。

#### G1 上部貝層出土土器 (Fig9 14~37)

14~22は、赤色顔料が縄文帯に塗彩されたもので、15を除き2本沈線による文様帯をもつものである。磨消繩文土器は、福田KII式土器系統のもの(24・33)もみられるが、箇描沈線の発達した土器(28)も認められる。また、31、34~37は、時期的に前記土器群に後続するものであると考えられる。

1~30の縄文土器は、縄文後期前半に位置づけられるものであるが、このなかで、14~30について、さらに時期的な先後関係を検討する必要があろう。

#### G1 暗茶褐色粘質土出土土器 (Fig9 13)

縄文時代中期初頭の包含層から出土した。堅い纖維による縄文地のうえに、連続爪形文が施されたもので、鷹島式または船元I式土器に比定されるものである。

#### G2 出土土器 (Fig10 38~50)

かく乱層中から出土した。38及び39は、曲線的または直線的な文様構成をもち、中津式の要素をもつものである。また、45は注口土器の底部であると考えられ、底部近くまで文様帯をもつ。

### 石器

#### 石錐 (Fig11 1~13・Fig 12 6・8)

Fig11・1~13は、G1 中央部で、下部貝層から一括して出土したものである。大型の礫石錐で、長軸の両端に打撃を加え糸掛けとしたものである。Fig12・8は、中期縄文土器片と共に出土したものである。Fig12・7は、局部磨製石斧であり、片面には敲打痕をもつ。

#### 骨角器 (Fig12 1~3)

1はヤスであり、2も一端が尖り気味に仕上げられている。1・2ともに細い加工痕をもつ。3は、先端部に円孔がみられ、細い加工痕をもつ。

#### 貝輪 (Fig12 4・5)

G1 かく乱層中から出土したものである。いずれも、円形の環状を呈するもので、ベンケイ貝製の可能性がある。

#### 歯骨 (PL. 18)

G1 及びG2 貝層中及びかく乱層中から出土した。イノシシ、シカ、イヌが検出され、イノ

シシは頭骨、顎骨が、またシカは顎骨が認められ、イヌについては小臼歯または大臼歯が認められた。

#### 人骨 (PL. 19)

G1 から乱層中から出土した。頭蓋骨、下頸骨、鎖骨、肩甲骨、前腕骨、尺骨、桡骨、手骨、寛骨、肋骨、大腿骨、脛骨の一部が認められ、上半身及び下半身の骨がみられることから、出土地点を中心とした小範囲に埋葬位置が求められよう。なお、出土人骨は男性のものと判断された。  
(山本)

註 (1) 古屋義男氏 (高知女子大学教授) から御教示いただいた。

(2) 林 一正氏 (高知県警察本部鑑識課法医研究員) から御教示いただいた。

## 2. 2 次調査

### 調査方法

宿毛貝塚周辺には、測量のための基準点が設置されていないため、発掘調査に先立ち基準点の設置を行った。基準点は、任意座標とし、X軸は真北に向う値を正、Y軸はX軸に直交する軸として真東に向う値を正とするようにとり、TP 1 ~ 10までを設置した。多角測量は、TP 1 の座標を X=1,000.00, Y=1,000.00 とし、10秒読みの光波距離計を使用して行った。なお、

Tab.1 多角測量座標成果一覧表

(路線名 宿毛貝塚  
測点名 TP 1 から TP 10 実測精度 1/33655)

| 測角点   | 方向点   | 方向角          | 水平距離(m) | X (m)    | Y (m)    | 座標点   | 標高(m) |
|-------|-------|--------------|---------|----------|----------|-------|-------|
| TP10  | TP 1  | 13° 24' 13"  | —       | 1000.000 | 1000.000 | TP 1  | 2.453 |
| TP 1  | TP 2  | 42° 19' 39"  | 29.981  | 1022.165 | 1020.188 | TP 2  | 2.887 |
| TP 2  | TP 3  | 264° 03' 20" | 49.881  | 1016.999 | 970.575  | TP 3  | 5.079 |
| TP 3  | TP 4  | 307° 54' 02" | 49.380  | 1047.333 | 931.610  | TP 4  | 6.689 |
| TP 4  | TP 5  | 184° 41' 53" | 70.909  | 976.676  | 925.639  | TP 5  | 4.680 |
| TP 5  | TP 6  | 158° 27' 57" | 13.783  | 963.604  | 930.008  | TP 6  | 4.140 |
| TP 6  | TP 7  | 206° 39' 48" | 44.843  | 923.530  | 909.885  | TP 7  | 3.733 |
| TP 7  | TP 8  | 88° 49' 39"  | 24.628  | 924.034  | 934.508  | TP 8  | 4.640 |
| TP 8  | TP 9  | 68° 03' 40"  | 36.285  | 937.601  | 968.161  | TP 9  | 2.569 |
| TP 9  | TP 10 | 44° 28' 20"  | 31.951  | 960.386  | 990.560  | TP 10 | 2.310 |
| TP 10 | TP 1  | 13° 24' 13"  | 40.723  | 1000.000 | 1000.000 | TP 1  | 2.453 |
| TP 1  | 鉄塔A   | 308° 02' 40" | 715.239 | 1440.785 | 436.728  | 鉄塔A   | —     |
| TP 2  | "     | 305° 39' 30" | 718.100 | "        | "        | "     | —     |

調査区北西の標高217.7mを測る願成寺の山頂にある鉄塔を方位標とし、鉄塔Aと呼称した。測量結果は、Tab 1に記し、同時に実施した水準測量の結果も同表に記載した。

発掘区は、まず東貝塚に南面する水田に $2 \times 6$ mのトレンチ(TR 1・2)を2本設けた。これらのトレンチからは貝層は確認されなかったので、土層観察のみにとどめた。次に、東貝塚南西部に隣接する水田にL字状のトレンチ(TR 3)を1本設けた。このトレンチからは、貝層は確認できなかったが、遺物包含層及び多數のピットが検出されたため、東端と北西部をそれぞれ拡張し、造構の検出に努めた。最後に、東貝塚北西部に隣接する水田に $2 \times 2$ mのトレンチ(TR 4~8)を5箇所設置した。これらのトレンチからも貝層及び遺物包含層が確認されず、土層観察のみを行った。なお、これら発掘区の測量は、調査前に設置した基準点の内のTP 1~5をもとに実施した。(Fig 2・3)

(廣田)

#### 層序

2次調査の対象区域は、大別してTR 1・2とTR 3及びTR 4~8の三群に分類されるが、層序についても、この三群ごとに分けて捉えることができる。

TR 1・2は、地表面の標高が2.30m前後を測る。両トレンチの基本的な層序は、第Ⅰ層・耕作土、第Ⅱ層・黒灰色粘質土層、第Ⅲ~Ⅳ層・かく乱層(盛土)、第Ⅴ層・黄灰褐色粘質土層(小礫混り)、第Ⅵ層・黒色粘土層、第Ⅶ層・黒灰褐色粘質土層、第Ⅷ層・黄褐色粘質土層(砂礫混り)となっている。(Fig 6・7)

TR 1においては、第Ⅱ~Ⅳ層の堆積は認められず、第Ⅲ~Ⅳ層は現在の水田を造成するために他所から搬入してきたものである。第Ⅴ層は旧耕作土と考えられるが、その直下の第Ⅶ層は地山となっており、良好な遺物包含層は皆無であった。

TR 2の第Ⅲ層も、TR 1の第Ⅲ~Ⅳ層と同じく人為的な二次堆積土であり、断面観察によれば、南北に段差のある地表を平坦に整地したことが明らかである。なお、第Ⅴ・Ⅵ層からは貝殻類の出土がみられたが、中・近世の陶磁器も伴出しており、純粹な遺物包含層ではない。

TR 3は、地表面の標高が2.90m前後を測る。同トレンチの基本的な層序は、第Ⅰ層・耕作土、第Ⅱ層・灰茶色粘質土層、第Ⅲ層・暗褐色粘質土層、第Ⅳ層・黄褐色粘質土層となっている。

第Ⅱ層からは若干の繩文土器、弥生土器及び中・近世陶磁器類を出土しており、第Ⅲ層は繩文時代後期の遺物包含層である。なお、第Ⅳ層は地山であるが、他のトレンチのものに比して礫の混入は僅少であった。

TR 4~8は、いずれも地表面の標高が5.10m前後を測る1区画の水田内に設定されたトレンチである。これらのトレンチの基本的な層序は、第Ⅰ層・耕作土、第Ⅱ層・かく乱層、第Ⅲ層・灰色粘土層、第Ⅳ層・茶灰色粘質土層(礫混り)、第Ⅴ層・淡茶色粘質土層(礫混り)、となっている。

第Ⅱ層は、近代の整地工事に伴う盛土層であり、TR 4・5においては厚さ50cmに及んでい

る。第Ⅲ層は旧耕作土である。第Ⅳ層は、TR 8 のみで、残存が認められ、若干の縄文土器細片も出土しているが、純粋な縄文遺物包含層ではない。第Ⅴ層は無遺物層であり、地山と考えられる。

#### 遺構 (Fig 6)

2次調査において確認できた遺構は、TR 3 のピット群のみである。先述の如く、TR 3 では、第Ⅲ層が縄文後期の遺物包含層であり、第Ⅳ層上面が遺構棱状面となっている。検出面の標高は、北側が約2.80m、南側が約2.55mを測り、南に寄るに従ってレベル高を減じている。

ピットは、形状の明確なものから不明瞭なものまで、合わせて45個確認されている。各ピットの平面形は直径25cm内外の円形を呈するものが多く、深さは5~30cmを測る。埋土は、第Ⅲ層と同質の暗褐色粘質土である。

これらのピット群のうち、P10・17・29・30・34・41からは若干の縄文土器片を出土しており、P13・30からはサヌカイト片を出土している。しかし、いずれも細片であり、図示できるものはなかった。

断面観察によれば、ピットには第Ⅳ層上面から掘り込まれたものと第Ⅲ層上面から掘り込まれたものがあるが、前述の如く埋土が第Ⅲ層と同じであるため、後者を第Ⅲ層上面で捉えることはできなかった。第Ⅲ層の出土遺物から推して、時期的には、前者は縄文時代後期後半に機能したものと考えられ、後者はそれ以降に機能したものと推定される。おそらく、これらのピットの中には掘立柱建物を構成していたところの柱穴も含まれると考えられるが、調査区が狭小であるため全容は不明である。

(下村)

#### 遺物

##### TR 2

TR 2 からは、縄文土器片、中近世陶磁器片、石錐、土錐が出土した。遺物は、表土層及び耕作土層中から出土したものが大半である。

##### 土錐 (Fig 14-1)

下半部が欠損し、中央部に最大径をもつものである。

##### 石錐 (Fig 14-2+3)

礫石錐で、長軸の両端の一面から打撃を加えて糸掛を作りだしたものである。2は砂岩で、3は頁岩である。

##### TR 3

TR 3 からは、縄文土器、石器が出土した。

##### 縄文土器 (Fig 13-1~27)

浅鉢・深鉢・鉢がみられる。口縁部は、波状のものと平縁のものがある。文様帶を口縁部と胴上部にもつもので、2条~4条の沈線を施し、列点刺突文をもつ。深鉢のなかには、胴部下半に縄文をもつものがある。伊吹町式土器の範疇に属するもので、縄文後期後半に属するもの

である。また、底部は平底のもの、凹底をもつものがある。

石器 (Fig. 14 4~7)

4はサヌカイト製のスクレイパーである。一部が欠損する。5は無茎石錐で、両側縁部に押圧剥離が施される。6は磨石で砂岩製。7は砾石錐で、大型のものである。 (山本)

## IV まとめ

宿毛貝塚の発掘調査として、東貝塚北東部（1次調査）及び東貝塚周辺部（2次調査）について調査を実施した。以下、その調査成果と今後の問題点にふれて、まとめとしたい。

### 1次調査

縄文人骨の発見に伴い、その出土地点を中心とした小範囲の調査であったが、東貝塚について新たな知見を得ることができた。調査地点は、昭和24年の発掘調査時に設定されたDトレンチの北東約12mの地点に位置するが、検出された貝層の厚さは、約35cmであり、Dトレンチで確認された約70cm厚の貝層にくらべて、極めて薄いものであることが判明した。G1の土層断面観察によれば、貝層が西側にかけて徐々に厚みを増していることから、調査地点は東貝塚の貝塚形成範囲の北西端に位置するものであると考えられる。

縄文人骨については、Dトレンチで検出されたような状況はみられず、搅乱層中に混入した状態で発見された。搅乱層には、近世陶磁器片が多数混在していることから、近世における掘削行為により、搅乱されたものと推測される。ただ、貝層下部からは縄文人骨は発見されず、本来の埋葬位置は、貝層の上部であった可能性が強い。人骨は、男性のものと考えられ、これまでの出土人骨と併せて、東貝塚から女性2体、男性1体の計3体の人骨が発見されたことになる。

貝層中からは、縄文土器、石器、骨角器、獸骨、魚骨が検出された。縄文土器は、福田KII式土器とともに、2本沈線によって区画された磨消縄文帯をもつ宿毛式土器がみられ、また、中津系統の土器と考えられる縄文土器も併出しており、宿毛式土器について具体的に検討していくための良好な資料が得られた。また、注口土器が3点出土しており、土器の組成について資料の増加が得られた。石器については、G1中央部の貝層中から、石錐の一括出土がみられ、注目される。貝層中からは、獸骨及び魚骨が検出されたが、獸骨のなかにはイヌの臼歯がみられ、シカ及びイノシシに加えて新たな動物遺体が確認された。また、魚骨については、混土貝層の水洗作業によって多数の雜骨が認められ、今後の発掘調査においては、貝層の水洗作業が必須になると考えられる。

今回の調査において、貝層下の暗茶褐色粘質土層中から、中期縄文土器及び石錐が検出され、縄文時代中期初頭の遺物包含層が確認された。遺物包含層は、厚さ約20cm前後であり、貝層は

形成されていないことが判明した。また、G2では、地山層である黄茶色粘質土層上面において、遺構の可能性をもつ浅い窪地状の落ち込みが検出され、縄文時代中期初頭の遺構が貝層下において存在する可能性が強まった。

## 2次調査

東貝塚周辺において、TR1～TR8の計8か所のトレンチを設定し、遺構及び遺物包含層の確認調査を実施した。TR1及びTR2は、東貝塚の東側に設定したトレンチであるが、遺構及び遺物包含層は検出されなかった。また、TR4～TR8までの計5か所のトレンチは、東貝塚の北西部において設定した発掘区であるが、遺構及び遺物包含層は確認されなかった。TR3については、東貝塚の南西に設定したトレンチであり、ここでは縄文後期後半の遺物包含層を検出することができた。検出された遺構は、小ピット群であるが、遺構の検出状態等から、縄文時代以降に形成されたと考えられるピットも認められる。また、遺構から出土した遺物は縄文土器の細片のみであり、縄文時代に形成された遺構を特定することは極めて困難であった。TR3から出土した縄文土器は、伊吹町式土器（彦崎KII併行）の範囲に含まれるものであり、他の時期の遺物を含まないことから、縄文時代後期後半の遺構形成が、TR3周辺に存在することが考えられる。また、TR3から貝層が検出されなかったことから、東貝塚の貝層の形成は、縄文時代後期初頭から前半にかけて行われ、貝層への埋葬行為が考えられる縄文時代後期中葉には、貝塚の形成は終焉を迎えたものと推測される。

1次調査及び2次調査の成果から、宿毛貝塚のうち東貝塚の貝層形成範囲について、ある程度範囲を限定することが可能となった。貝塚の貝層形成範囲は、現在国史跡として指定されている範囲のうち、畠地となっている部分が該当すると考えられる。縄文時代後期初頭から前半にかけての遺構が存在する地点については、今回の調査で明確にすることはできなかったが、東貝塚の北側または南西側において、住居跡等の遺構が存在することも考えられ、今後の調査に期待したい。

(山本)

## V 付編 宿毛貝塚採集資料

宿毛貝塚から、これまで表面採集された遺物は、縄文土器、石器、骨角器、獸骨、貝類である。遺物の多くは、主に東貝塚で表面採集されたものであるが、出土地点が明確なものは少ない。遺物のなかには、宿毛貝塚の様相を探るうえで良好な資料が含まれており、宿毛貝塚の発掘調査を機会に、その主要なものを調査報告書に併せて紹介することとした。

### 縄文土器

中期縄文土器 (Fig17 37～39)

東貝塚の南端中央部で出土したもので、この土器の出土から、周辺に縄文中期の遺物包含層が存在することが推測されるに至った。宿毛C式土器と呼称されるものであるが、広義の船元式の範疇で捉えられるものであり、船元I式～II式に分類されるものである。深鉢形土器の口縁部で、堅い繊維による調文が施され、隆起線及び連続爪形文がみられる。縄文中期初頭～前半に位置づけられるものである。

#### 後期縄文土器

後期縄文土器は、器形、文様構成等から1類から6類まで大別される。

##### 1類 (Fig 15 1～8)

磨消縄文を特徴とするもので、曲線と直線を交えた文様の構成がみられる。文様帶は、沈線の先端をからまして入組文を描くものや、直線を主体とする沈線を組み合わせた構成をもつものがある。縄文帶は、二本単位の沈線で描かれるものほかに、三本単位の沈線によるものも含まれる。器形は、深鉢、鉢、浅鉢があるが、浅鉢形が占める割合が多い。器面が研磨され、光沢をもつものが多い。また、沈線間に赤色顔料が塗られたものもみられる。

##### 2類 (Fig 15 9)

貝殻擬似縄文をもつもので、籠描沈線間にヘナタリ巻貝を回転させて擬似縄文を描く。器形は深鉢形であり、器面は研磨されている。

##### 3類 (Fig 15 10～14)

籠描沈線の発達したもので、口縁直下と頸部に刻目が施され、籠描沈線間に磨消縄文がつけられたものである。刻目は、二本沈線で構成される縄文帶にみられるが、なかには棒状工具の先端を押出したものもみられる。器形は、深鉢形が多い。

##### 4類 (Fig 16 15～17)

籠描沈線で構成される文様をもつもので、沈線文系土器である。沈線の先端が、入組文を描くものや、直角に折れ曲がり幾何学的な文様構成をもつものがある。器形は、深鉢と浅鉢がみられ、器面はよく研磨されている。

##### 5類 (Fig 16 18・19)

縄文帶と無文帶の境界を沈線で両するもので、縄文系の鉢である。口縁部はくびれて、幅広い無文帶をもつ。また、縄文帶に、竹箒による円形の施文が多数施されたものもみられる。

##### 6類 (Fig 16 21)

無文の条痕文土器である。口縁上端に刻目が施され、貝殻条痕により、仕上げられている。以上、後期縄文土器を6類に分類した。これらの土器は、これまで宿毛式土器と呼称されているものが主体であり、採集資料の大半を占めるものである。

#### 土器底部 (Fig 17 22～26)

平底のものと、上り底のものがみられ、底部端が磨耗しているものがある。

#### 注口土器 (Fig 17 29)

注口土器の把手である。側面に3本の籠彫沈線がみられる。

**土偶 (Fig. 17 30)**

土偶の脚部であると考えられるもので、端部をつまみ、足部と脚部を区分している。残存長5.3cm、幅2.3cm、厚さ2.0cmで淡黄褐色を呈する。

**玦状耳飾 (Fig. 17 31)**

蛇紋岩製で、全体の約1/3を欠損している。表面はよく研磨されており、光沢をもつ。断面は、やや扁平な楕円状を呈する。

**骨角器 (Fig. 17 32)**

鹿角製で、鹿角の一部を切断し、切断面を研磨したものである。

**石錐 (Fig. 17 33~35)**

自然石の長軸両側縁部に打撃を加えて糸掛けを作りだしたものである。33は約30g、34は約26.5g、35は48.5gを測る。  
(山本)



## 図面・図版





Fig. 1 貝塚周辺図



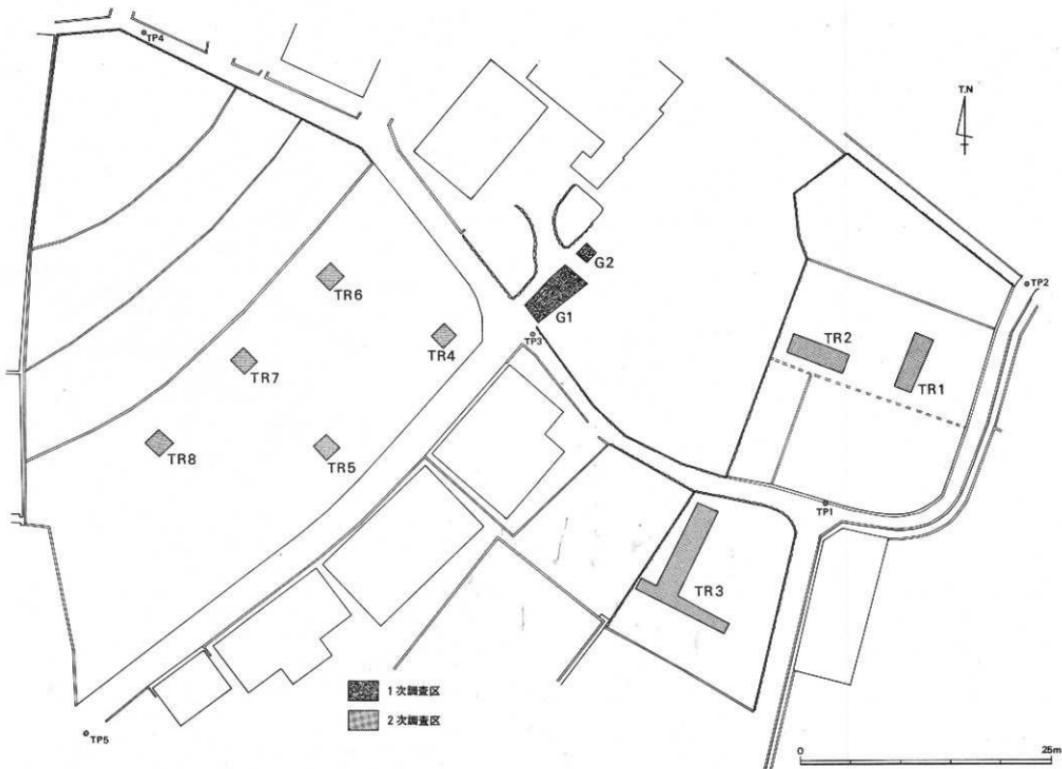


Fig. 2 周辺地形図及び調査区設定図

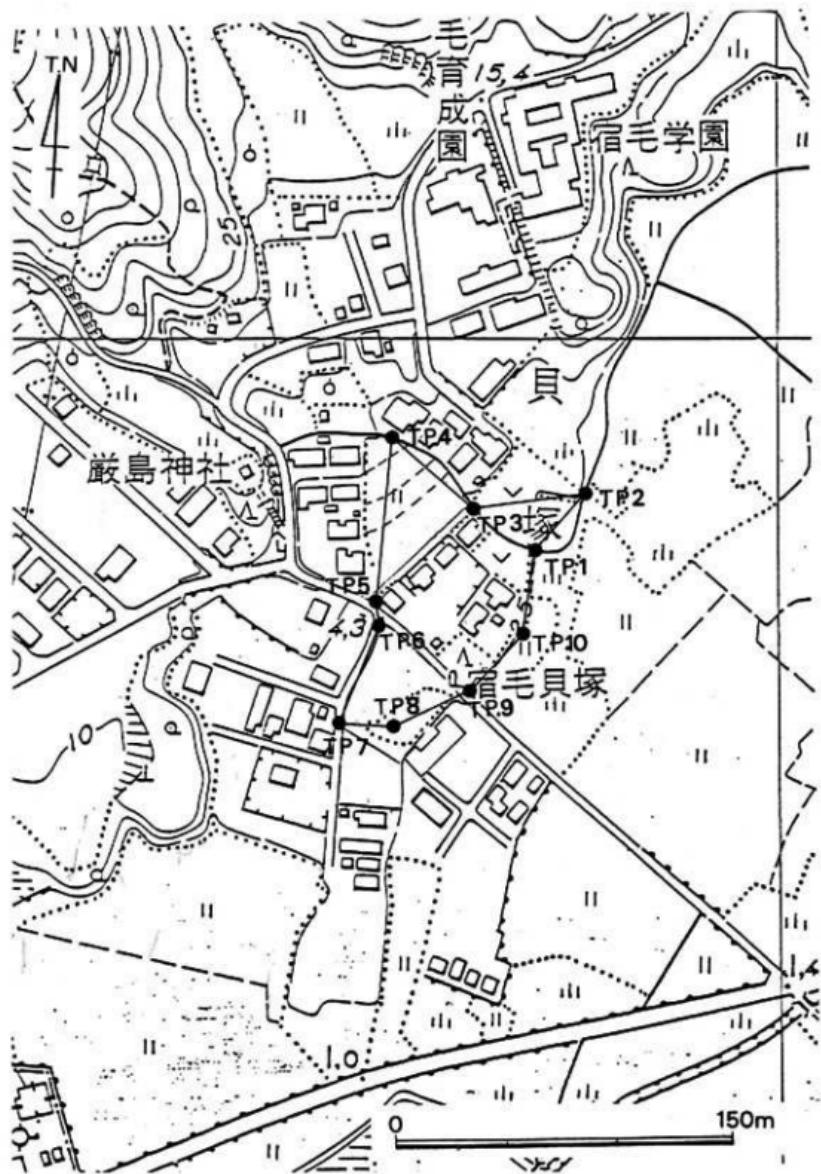
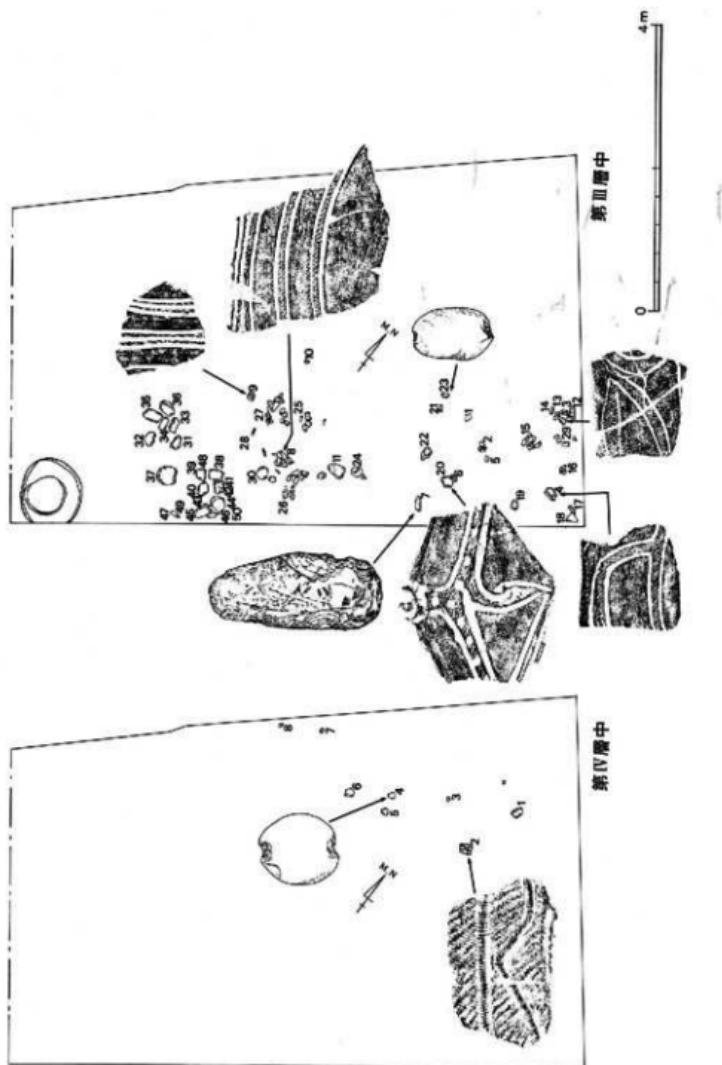


Fig. 3 多角測量基準点網図



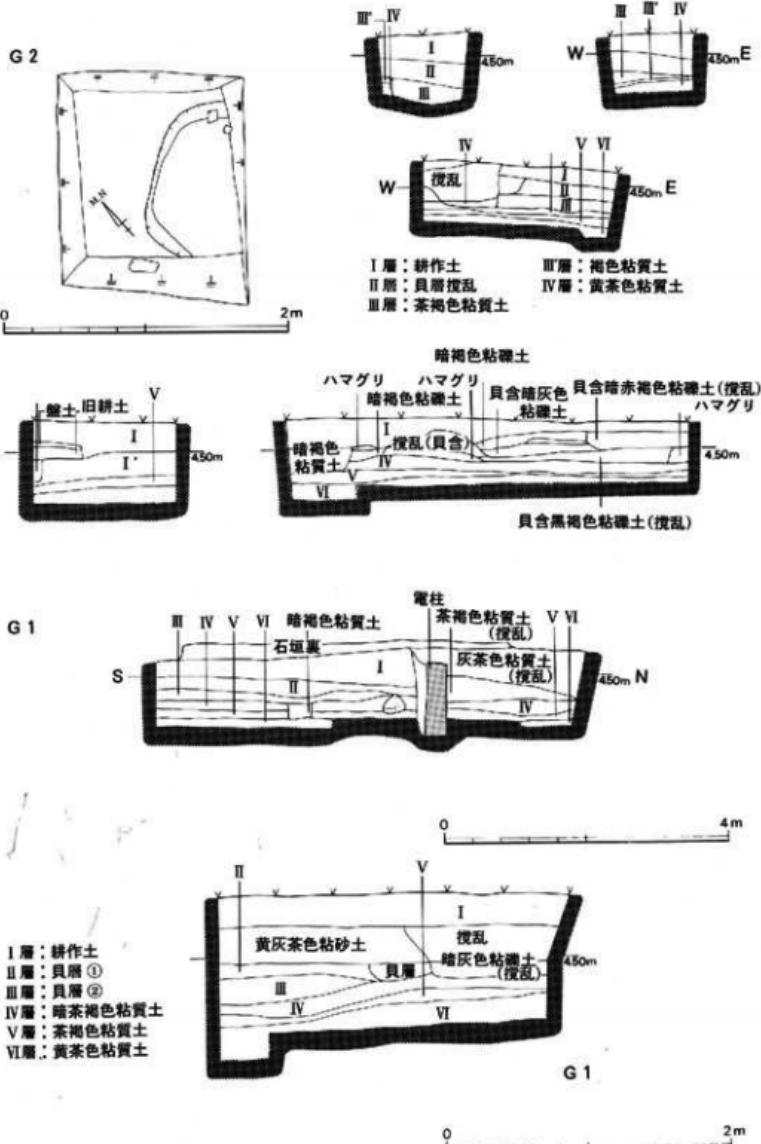


Fig. 5 G2 遺構及びG1・2 セクション

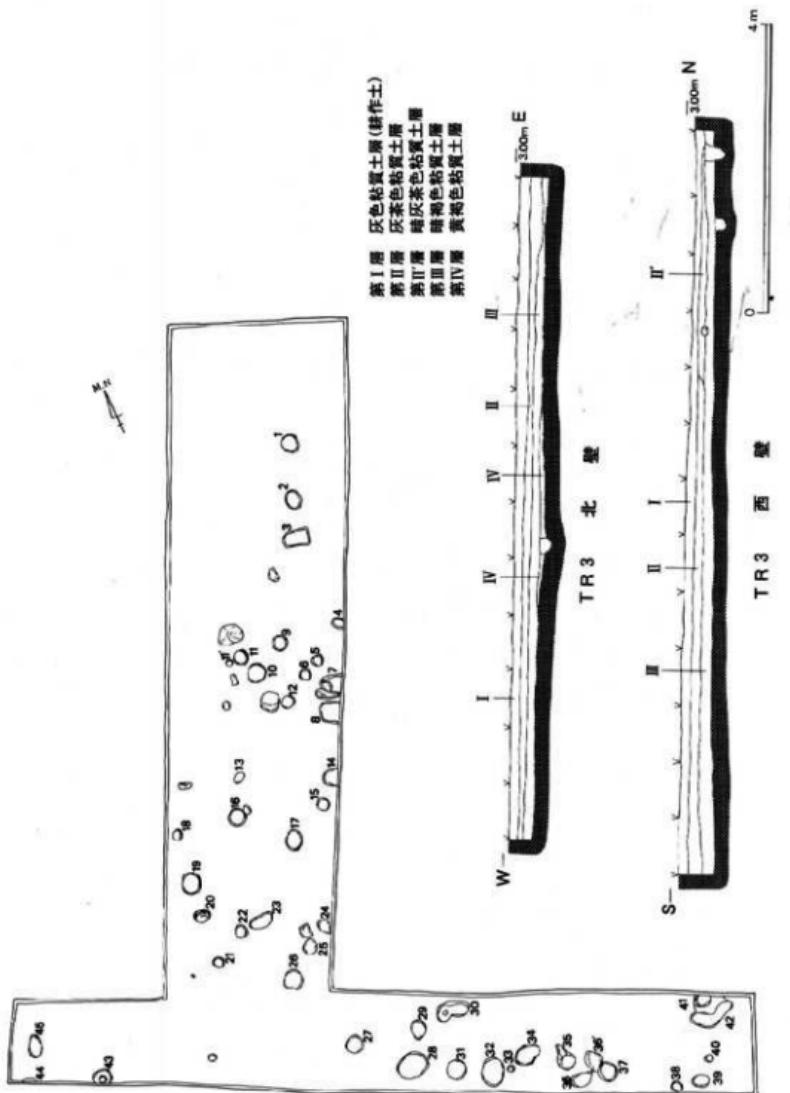
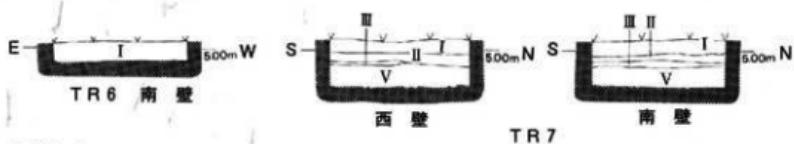
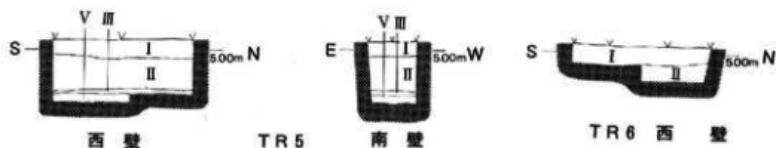
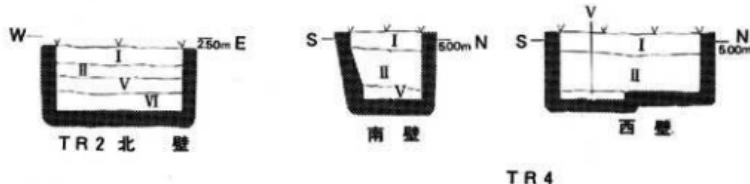
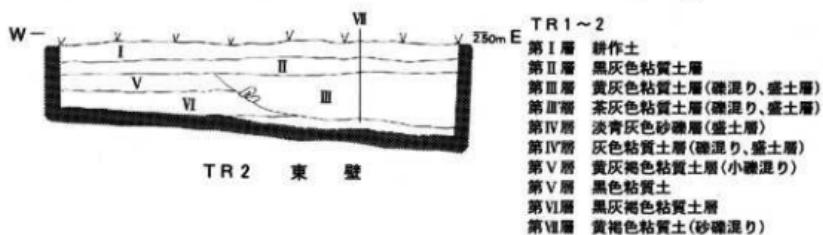
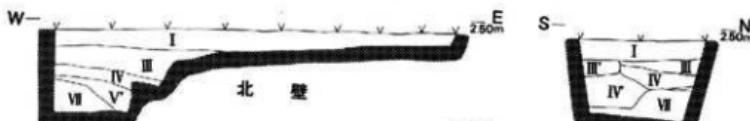


Fig. 6 TR 3 造構平面図及びセクション



#### TR 4~8

- 第Ⅰ層 耕作土  
第Ⅱ層 淡黄茶色土層(礫混り、盛土層)  
第Ⅲ層 灰色粘土層(旧耕作土)  
第Ⅳ層 青灰色粘土層  
第Ⅴ層 茶灰色粘質土層(礫混り)  
第Ⅵ層 淡茶色粘質土層(礫混り、地山)

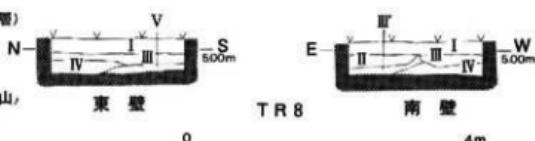


Fig. 7 TR 1~8 セクション

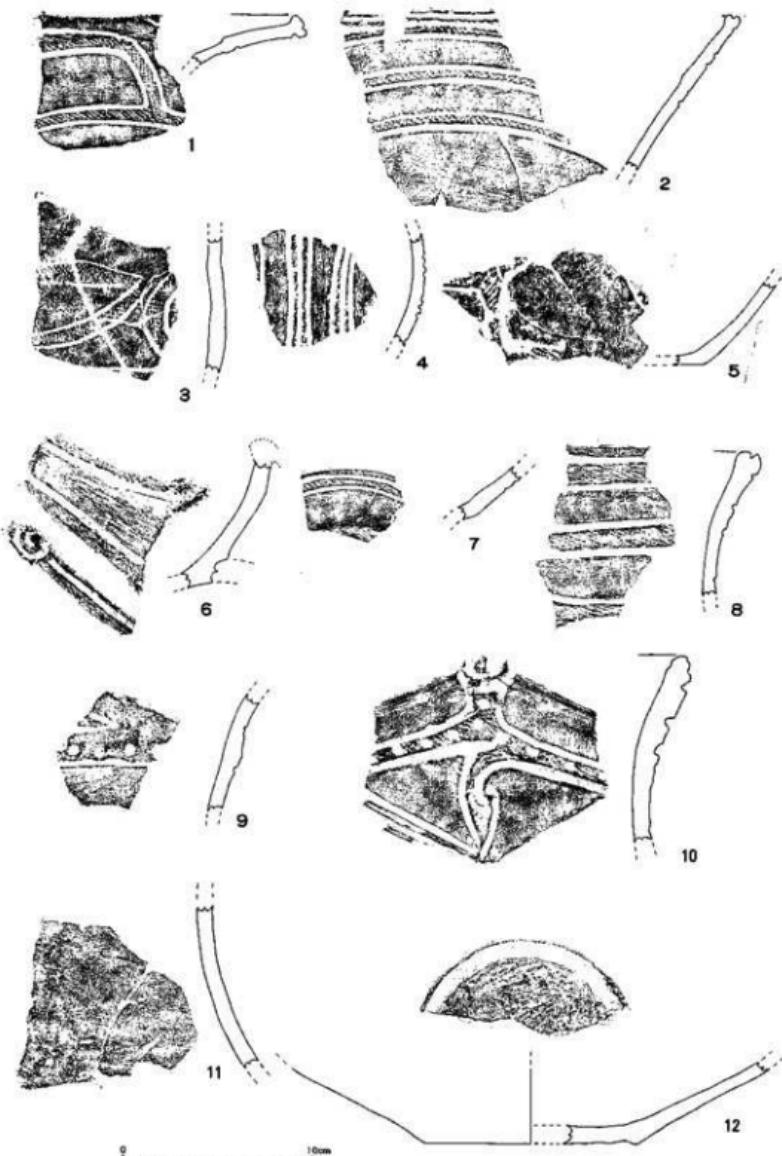


Fig. 8 G 1 (下部貝層) 出土縄文土器拓影図

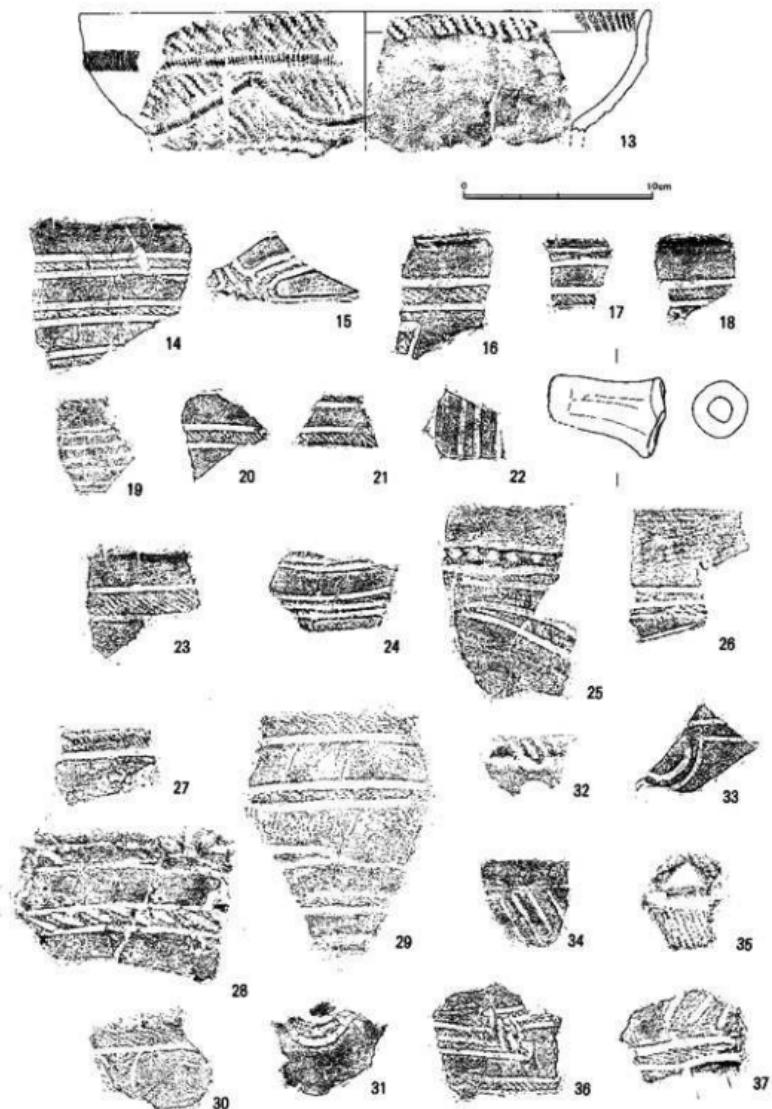


Fig. 9 G1 出土繩文土器拓影圖

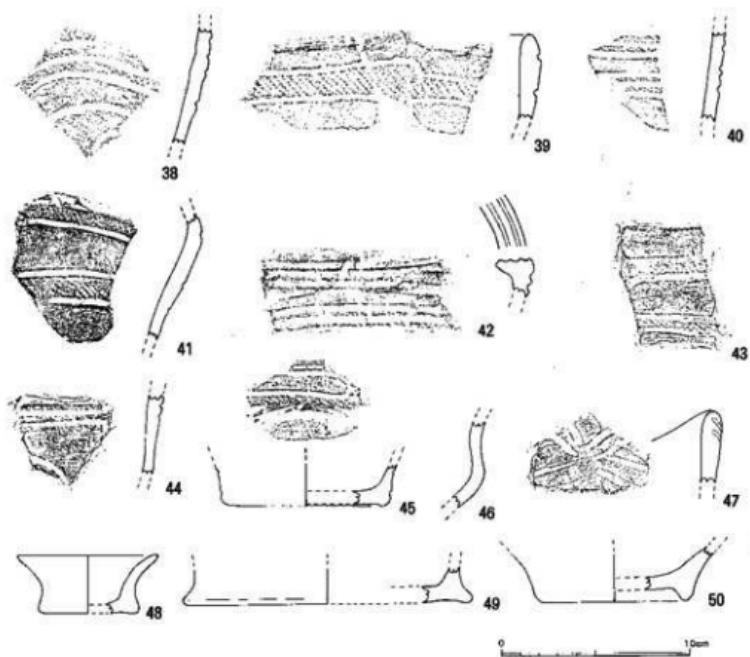


Fig.10 G 2 出土遗物实测图

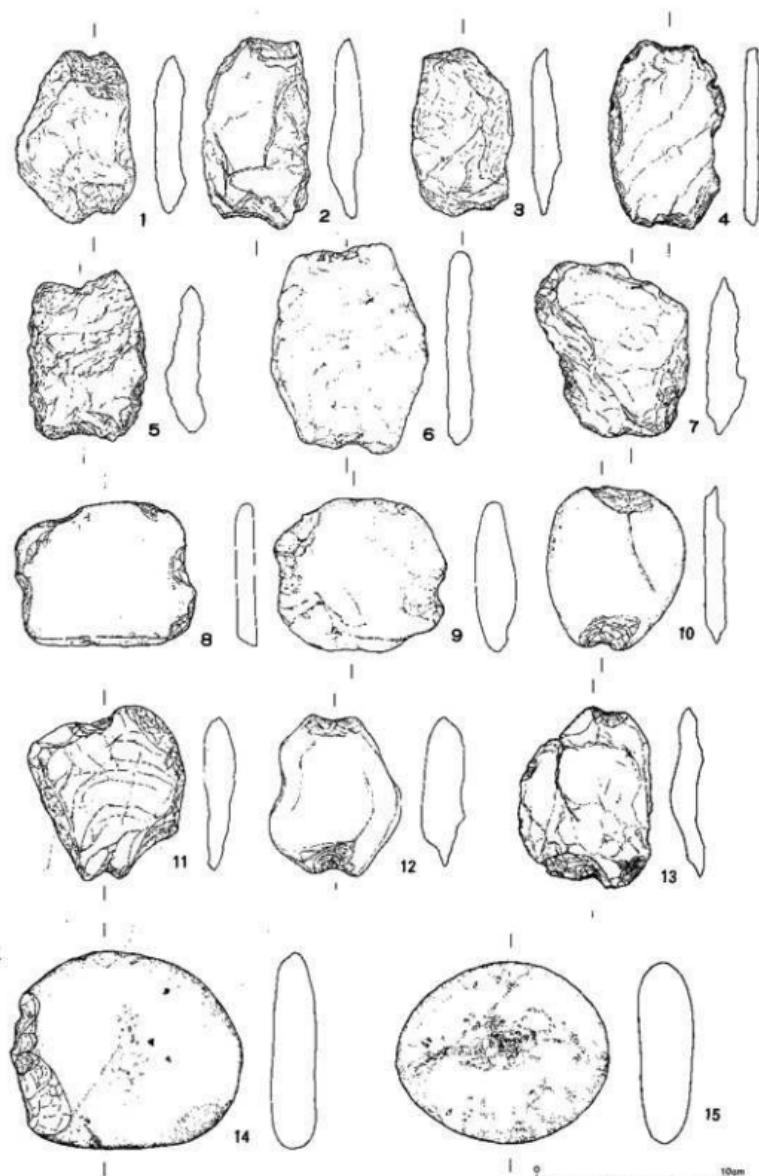


Fig.11 G1 出土遺物実測図(石器)

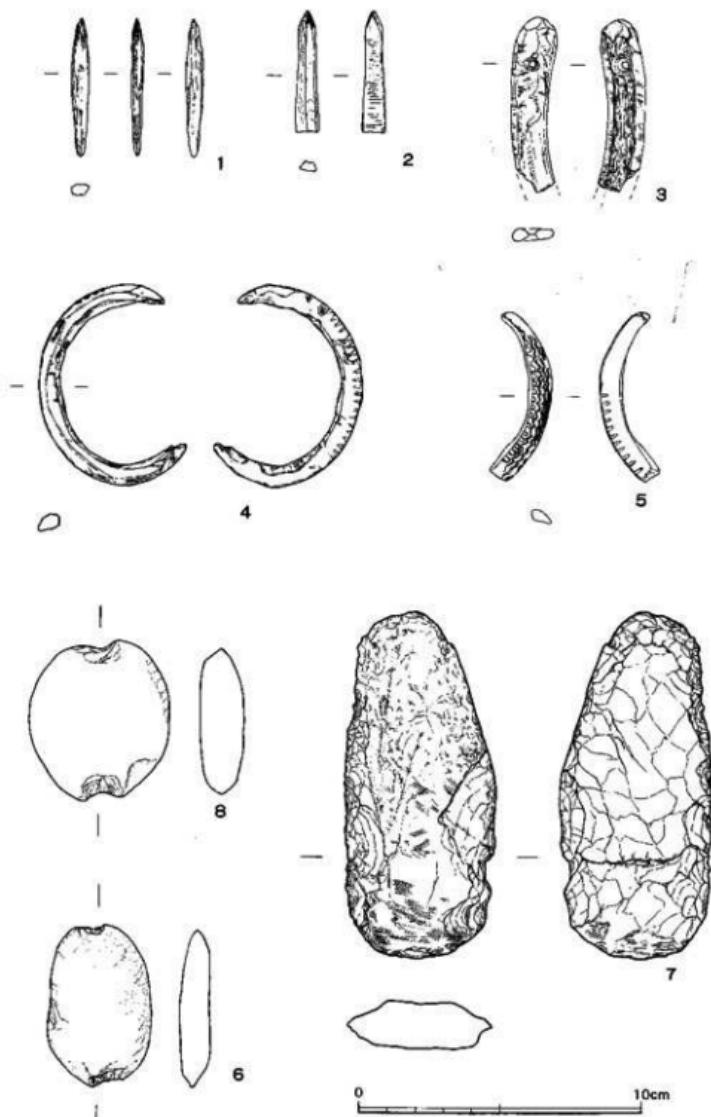


Fig.12 G 1 出土遗物实测图

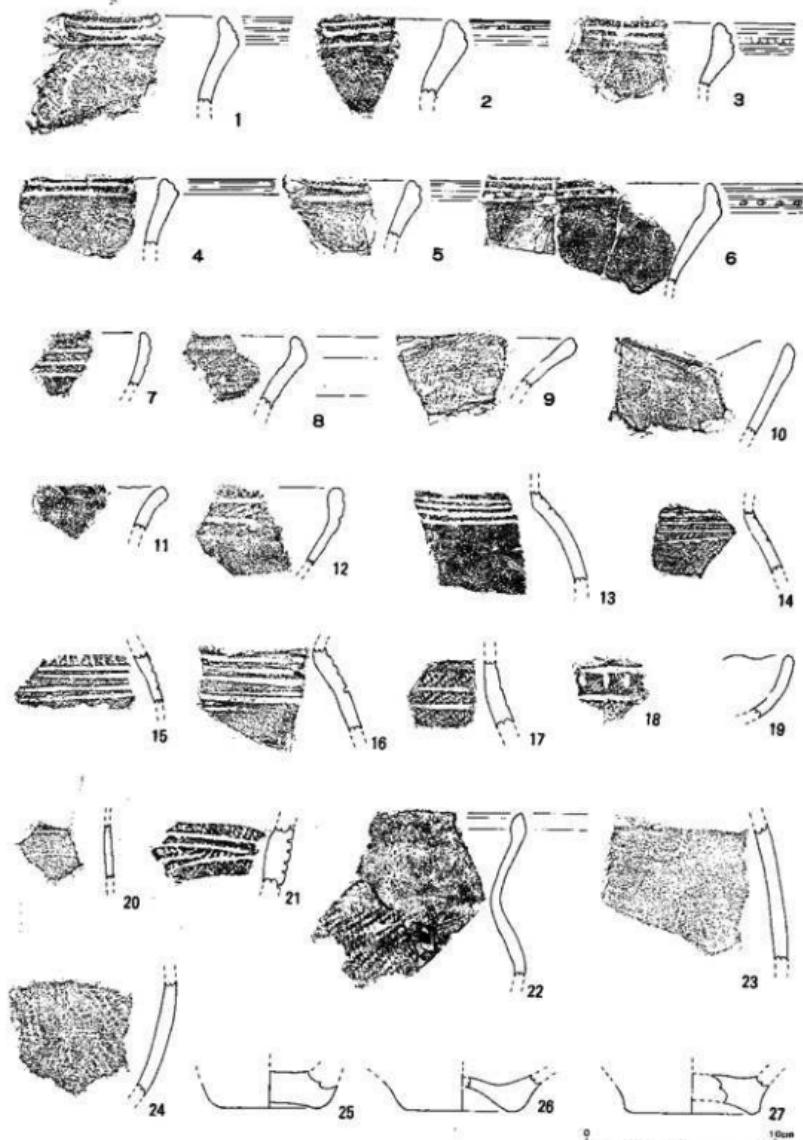


Fig.13 TR 3出土繩文土器拓影圖

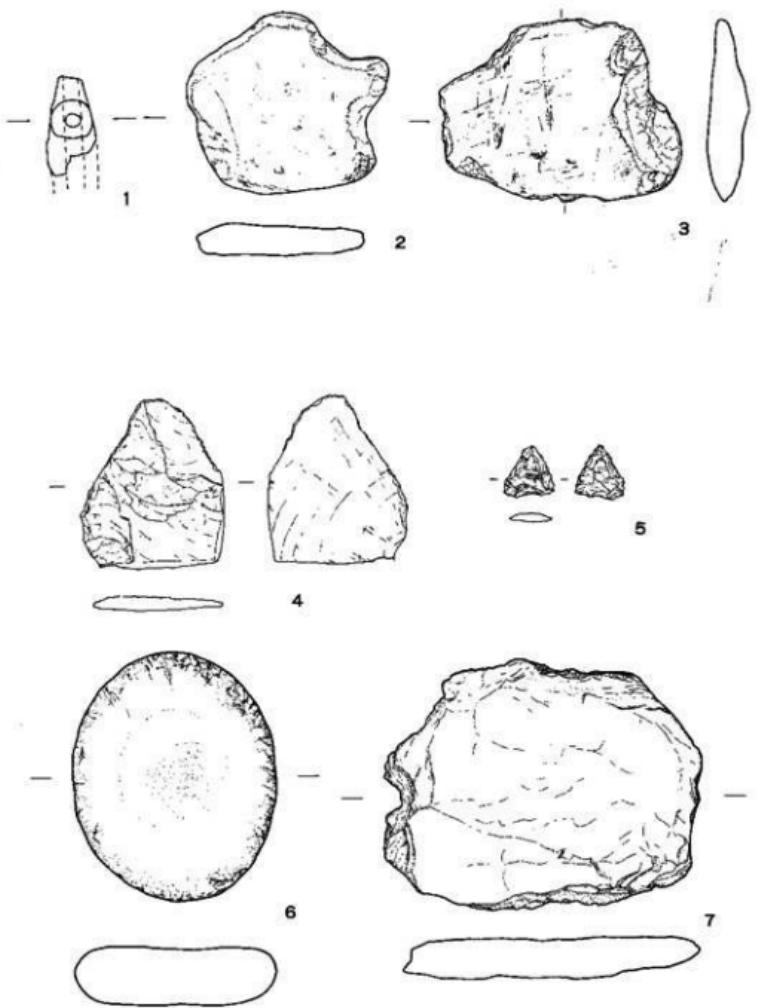


Fig.14 TR 2・3出土遺物実測図

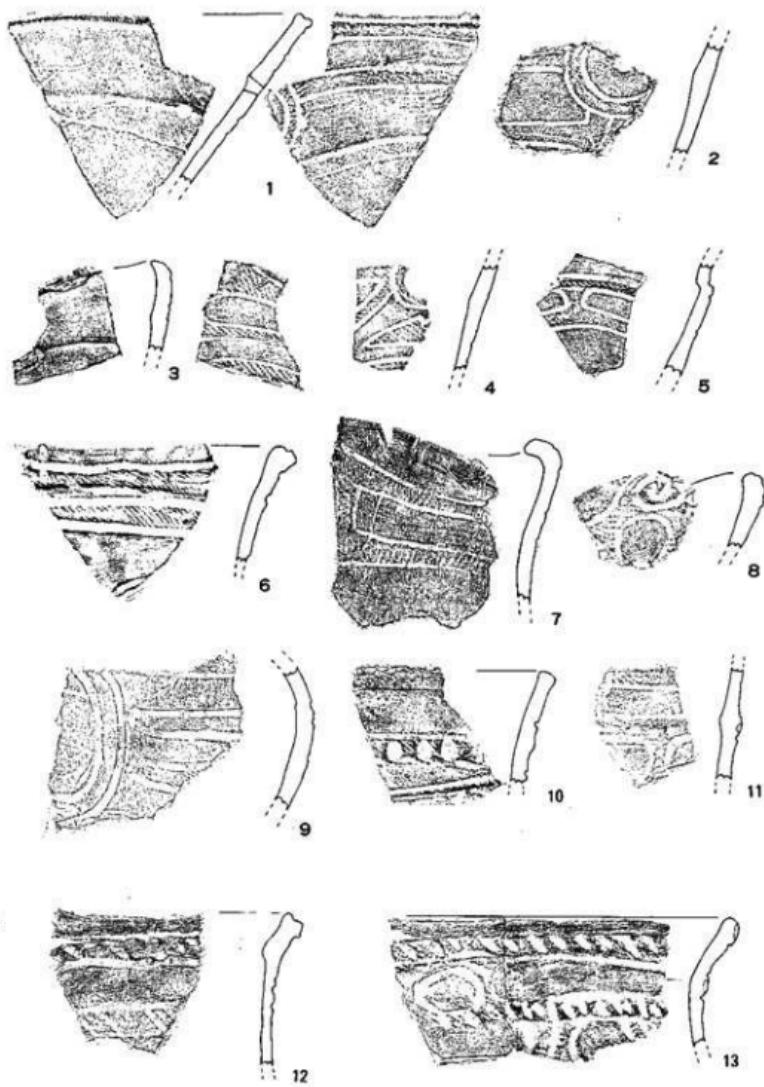


Fig.15 楊文土器拓影圖 (I ~ III類)

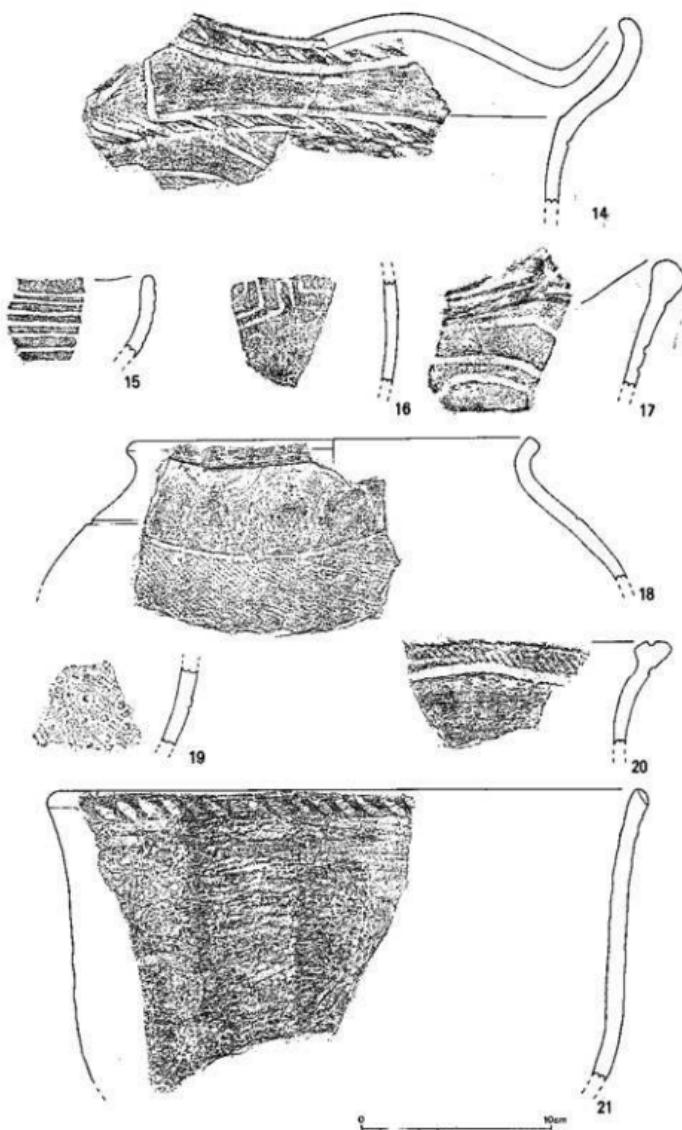


Fig.16 繩文土器拓影図 (III~V類)

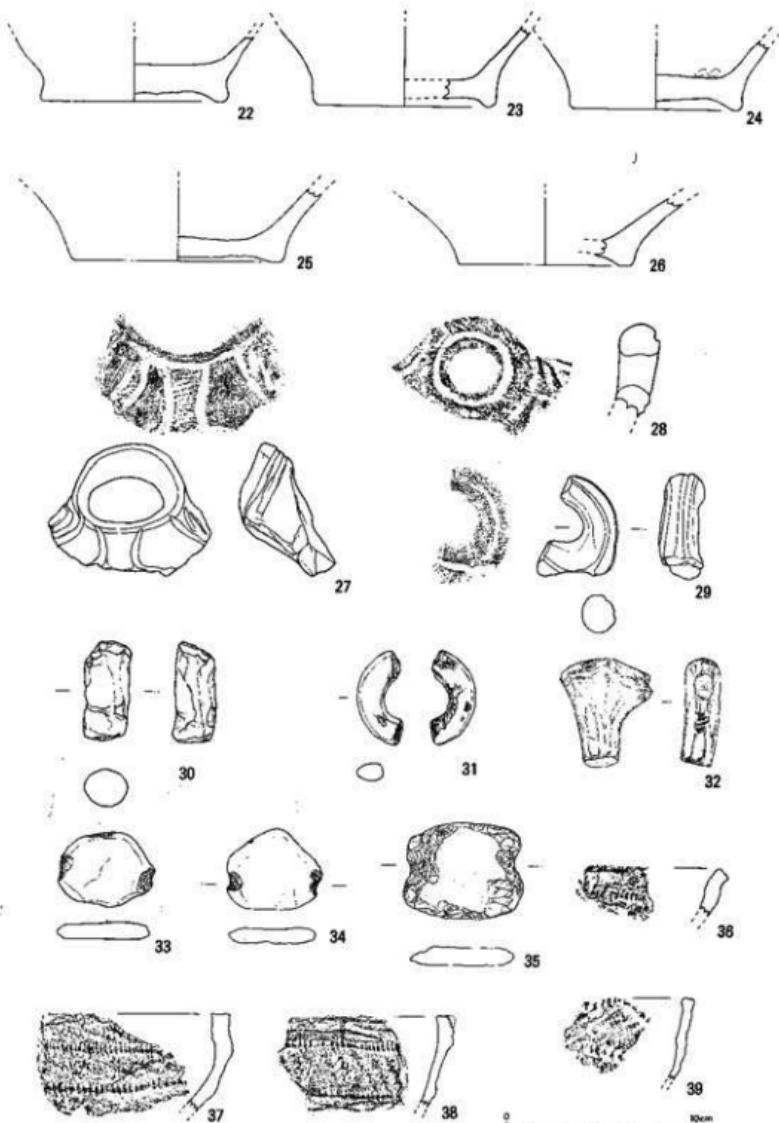


Fig.17 縄文土器、石器実測図



遺跡遠景（北から）



同上（南から）



東貝塚近景（東から）



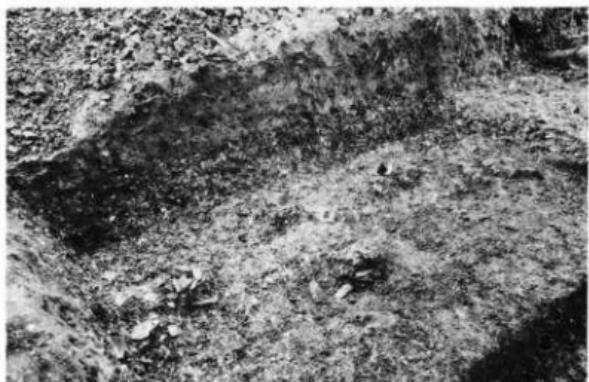
1次調査地近景（発堀前・南から）



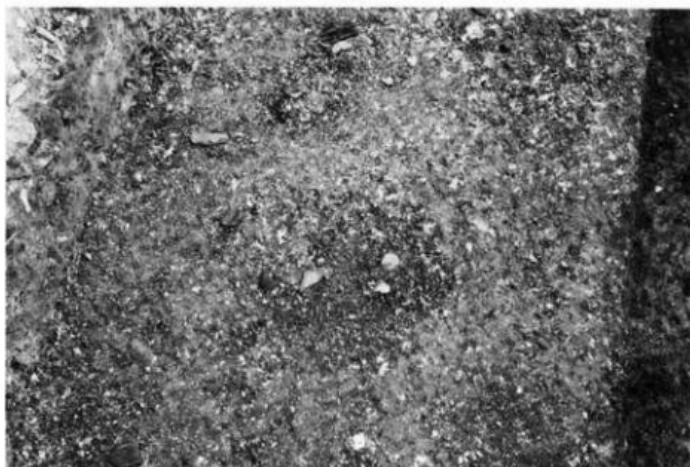
G 1 設定状況（南から）



G 1 調査風景（西から）



G 1 第Ⅲ層中遺物出土状態（北から）



同 上（北東から）



G 1 石錐出土状態（南から）



G 1 完掘状態（西から）



G 1 土層堆積状態（北から）



G 2 完掘状態（西から）



G 1 完掘状態（北東から）



同上（南から）



TR 1・2 調査風景（西から）



TR 1 土層堆積状態（南東から）



TR 3 遺構検出状態図（西から）



同上（北から）



TR 3 完成状況（西から）



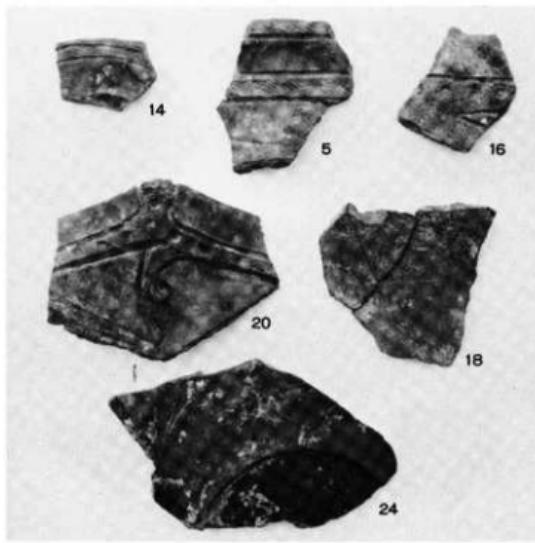
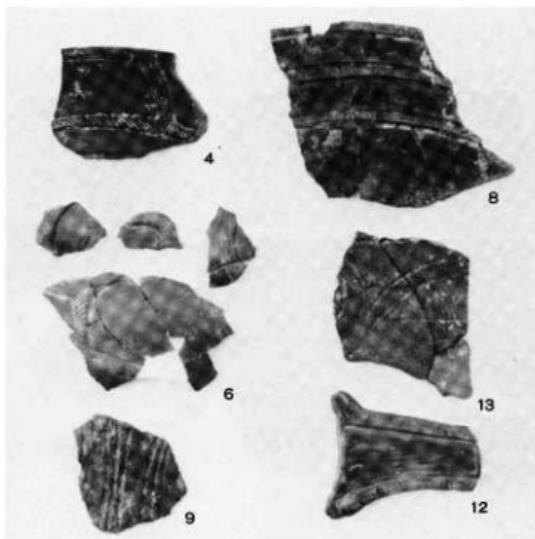
TR 4～8 調査地近景（南から）



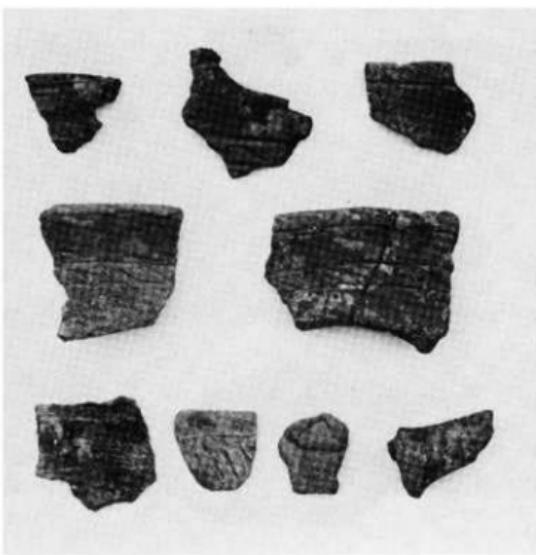
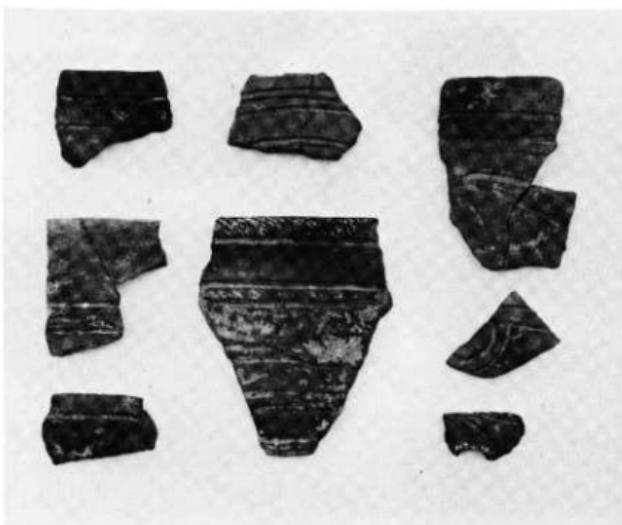
TR 4 ~ 8 設定状況（北東から）



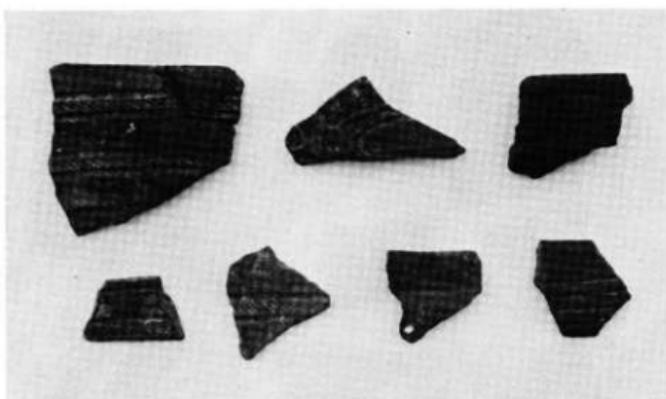
TR 6 完成状況（北東から）



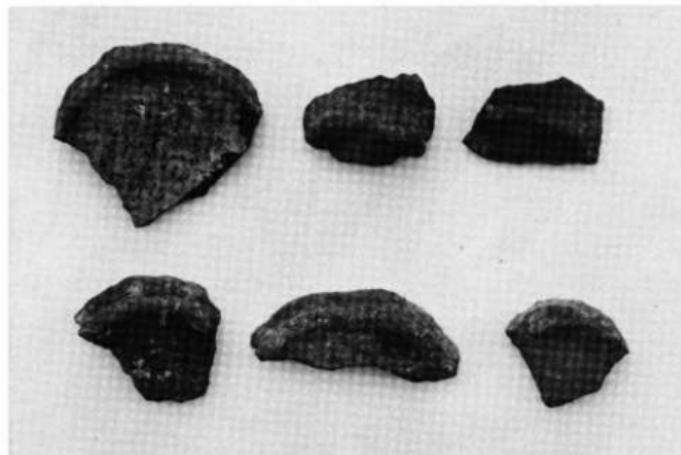
G 1 貝層出土純文土器



G 1 貝層出土繩文土器

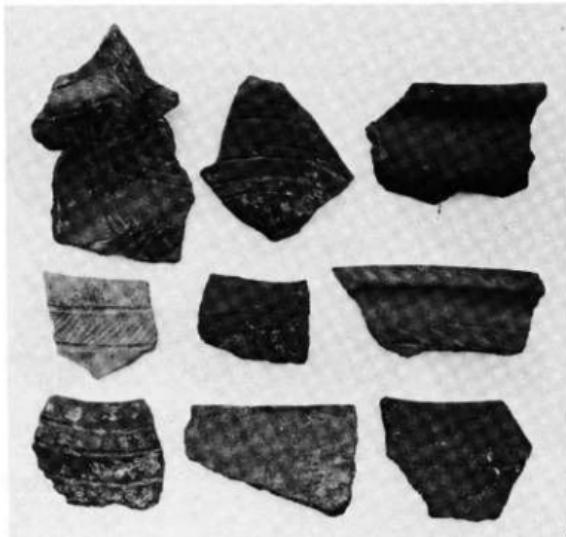


赤色顔料塗彩土器

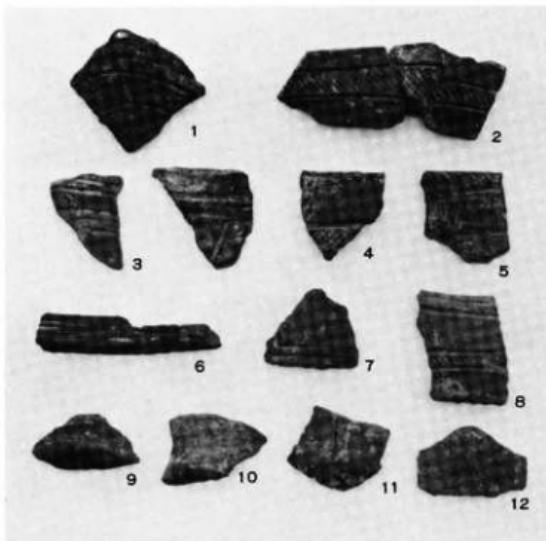


底部

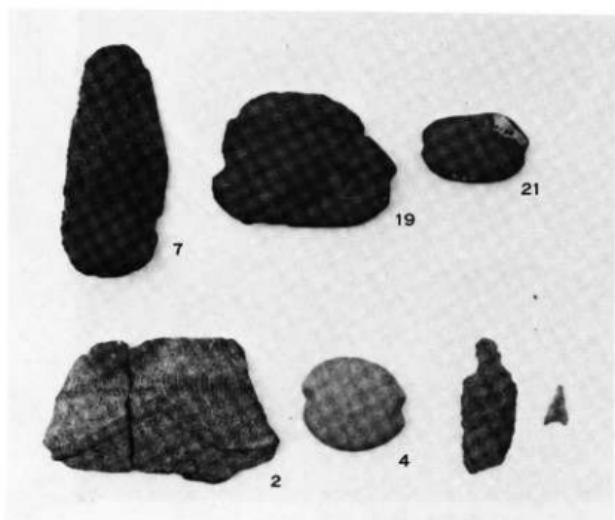
G 1貝層出土漆文土器



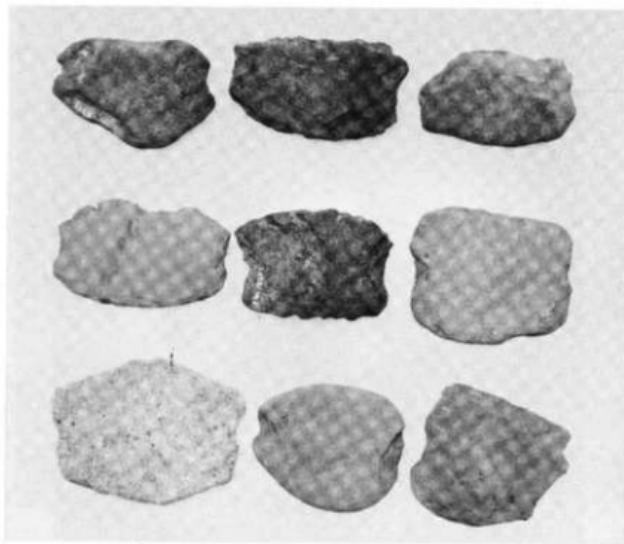
G 1 かく乱層出土縄文土器



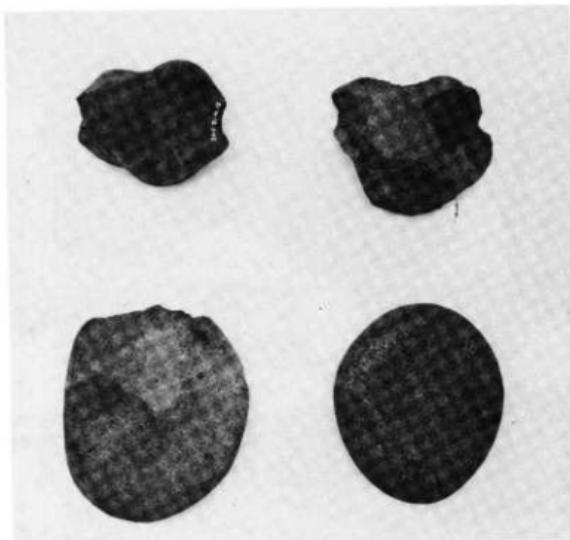
G 2 かく乱層出土縄文土器



G 1 出土 石器・土器



G 1 貝層出土石錘（一括出土）



G 1 貝層出土 石器・貝類



G 1 出土貝輪・骨角器



- 1 魚・椎骨  
2 イノシシ・大臼齒  
3 イノシシ・犬齒  
4 イノシシ・頭骨  
5 シカ・額骨

G 1 出土魚骨・獸骨

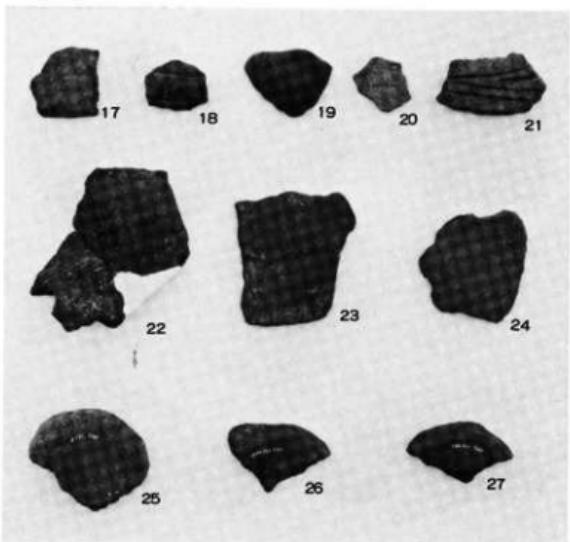
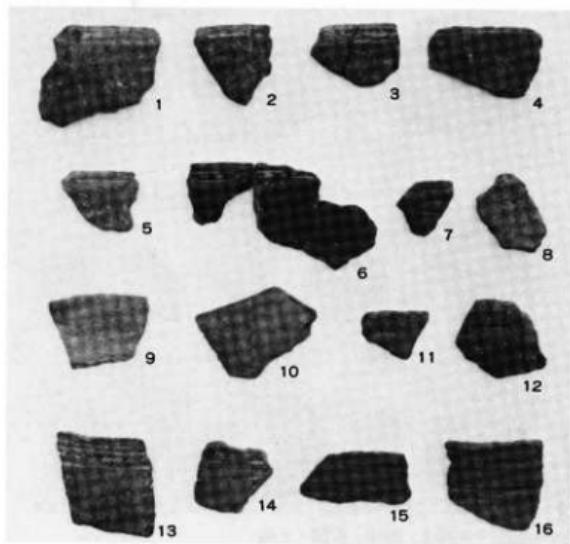


1 頸蓋骨 3 肩甲骨  
2 眼骨 4 手指

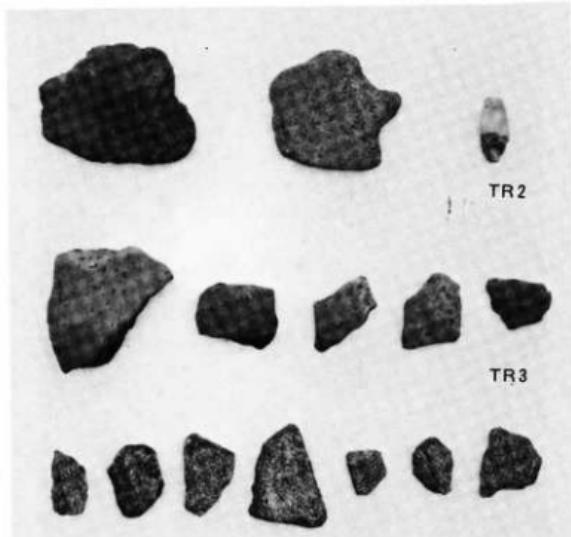


G 1 出土 人骨

1 助骨  
2 せきつい  
3 接骨

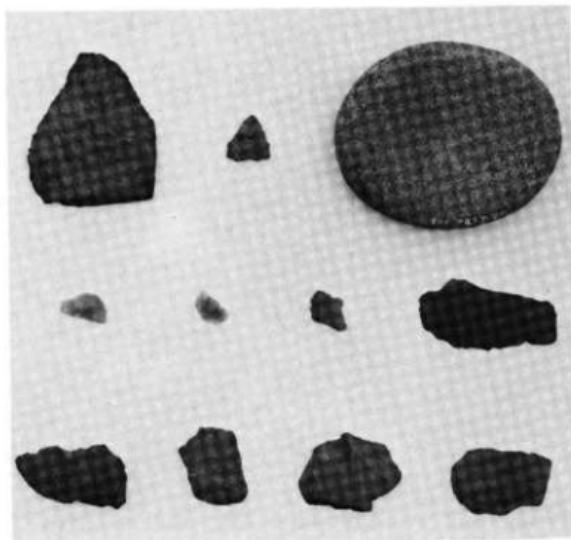


T R 3 包含層出土純文土器

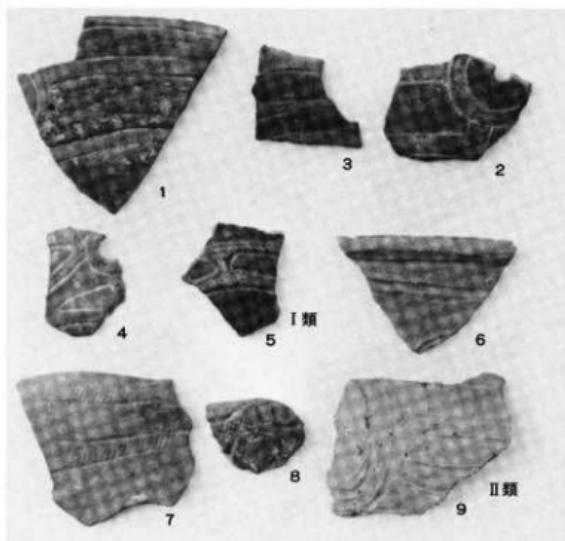


TR 2 出土 石錐・土錐

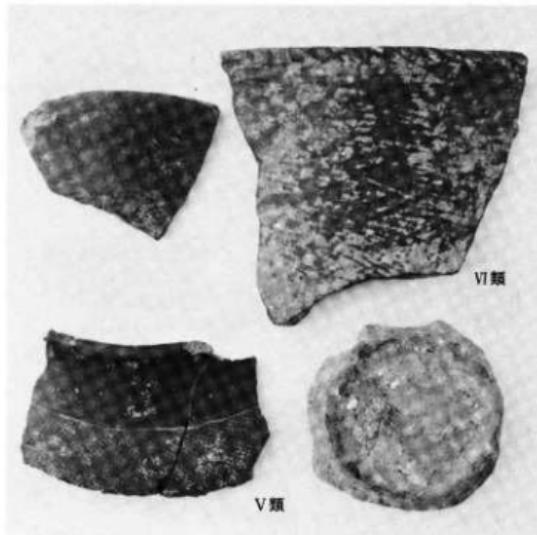
TR 3 出土 弥生土器（上段）、結晶片岩（下段）



TR 3 出土 石器・石器剥片



宿毛貝塚採集資料



宿毛貝塚採集資料

宿毛貝塚発掘調査報告書

1986. 3.31

編集・発行 高知県教育委員会

印 刷 高知県印刷所

